



仁淀川の数少ない沈下橋

— 浅尾沈下橋 —

川岸に係留されている川船

現在仁淀川本流には、6基の“沈下橋”が掛っているが、越知町内に最も多く3基ある。「浅尾沈下橋」はその内の一つである。前回紹介した「片岡沈下橋」(『不思議の森から』Vol.29, 2013)の一つ上流の沈下橋である。

「あじさい街道」に至る鎌井田橋東詰めから仁淀川左岸に沿って走る町道を約1km行った所にある。橋幅：3.7m、長さ：約103m。沈下橋はその橋脚に特徴・個性があるが、ここでは三本支柱で橋脚は11m間隔で9脚立っている。10月1日に訪れた時は、水量がやや多く、水も少し濁っていて、橋の上を歩いていると吸い込まれそうな気がする。橋の天端から水面までは4.1mあるが、大雨が降って水量が増したのか、橋上には上流から流されて来た枯れた植物片が打ち上げられていた。つまり、この高さの橋を越すほどの雨量があったという証しである。それほど、仁淀川の豪雨時の増水は激しい。そういった豪雨による増水時に敢えて水面下に没するように、水の抵抗を少なくするように橋脚や桁の両側面がアーチ状に造られたのが“沈下橋”である。

浅尾沈下橋のある鎌井田地区は、右岸(南岸)は45度ほどの急傾斜地で、逆に左岸(北岸)は緩やか

な地形広がっていて、そこに集落が開けている。この日は、曇りや雨の続く中秋の束の間の晴れ間であったが、蒸し暑い気分で、橋の北岸には曼珠沙華が咲き誇り、カラスアゲハが10頭、ミカドアゲハが3頭花と戯れていた。ツユクサも今が満開で、ネコジャラシやススキも穂を出している。橋のすぐ上流には、アユ漁のためのものであろうか、生い茂る葦の間に一隻の川船が繋がれていた。実にのどかな光景である。

「浅尾沈下橋」は、高知県・よさこい祭りにまつわる実話を基に映画化された青春ドラマ『君が踊る、夏』(東映, 2010)のロケ地にも使われた。また、去る9月26日には、高知県立牧野植物園で開催された、土佐和紙を使った『ちぎり絵ワークショップ』に参加された故・三笠宮寛仁親王の長女・彬子女王殿下も鎌井田の「浅尾沈下橋」まで御足を運ばれた。

“仁淀ブルー”の名付け親であるネイチャーフォトグラファーの高橋宣之氏は、「仁淀川流域における絶景ポイント」として、“仁淀ブルー”が顕著な安居溪谷、原始の森横倉山とともに、日本の原風景の残るここ浅尾沈下橋のある鎌井田地区を挙げている。

「嘗て私の見出したる二新属の植物に就きて」

大倉 浩典

牧野富太郎博士と同じ佐川町出身で、博士の第一の愛弟子であり世界的な菌類学者、そして、『横倉山タイプ植物』の一つである「コオロギラン」の第一発見者（命名：牧野富太郎）として知られる吉永虎馬〔明治4（1871）－昭和30（1946）〕。虎馬は、高知高等學校（現高知大学）講師の時、高知博物會の『博物會報』（第二號：昭和5年11月発行）において、発見者しか知らない「キレンゲショウマ」の発見及びその後のいきさつや、「コ

オロギラン」の発見の様子などを発表している。土佐を代表する植物に関する貴重な記録であるため、今回その真実・実態を紹介することにする。

尚、本文はその時代を考える上でできるだけ原文（旧字体）のまま表現することに努めたが、わかりやすくかつ読みやすくするために、難しい旧字体は（ ）付きで註釈を付けるかもしくは一部新字体に改めた。

我土佐国所産植物の大部分を採集調査したる人は勿論牧野先生であって、随て新種を多数発見記載せられたことは今更言ふ迄もないことである。私は幸に先生と同郷に生まれて幼時より非常なる知遇を辱ふし（？）、常に何角と其懇切なる指導を受けて今日に及んで居る。私は少年時代屢々先生に随ひて採集に赴きたることもあり、旁当時発見せられたる植物の採集前後の事情などに就きて多少承知して居ることもあるので往時を追想しつゝ、先づ私の関係したるものを今回は記して見んと思ふ。此等の事は新しき学問の参考ともなる様な有益なるものではなくて、全く雑誌の埋草まいそうとも言ふべきものであるから、若し幸に見てやらふと思ふ人があるならば、予め其積りで読んで戴き度いのです。

私がこれ迄採集したるもの、内、自分でも多少たりとも学界の爲め利益を興（与）へたと思ふものは菌類や苔類方面のものであるが、此等は又何時か機を得て記すこと、し今回は顕花植物に止めて置くこと、する。

私が発見に関係したるものに二つの新属植物がある、其一はキレンゲショウマと、他の一はコホ（オ）ロギ

ランとである。いずれも頗る珍奇にして且極めて顕著なる品種である。

私が少年の頃、即明治21年（当時17歳）の夏、本県、

尋常中学校の黒岩先生、中学海南学校の林、矢野両先生や観測所の楠瀬技手等が中学生数名を率ゐて石槌（鎚）山へ登らるゝ際御供をした事がある。当時は勿論平地にても十分に道路が開けて居らず（松山→高知国道開通 明治27年）中々の困難であった、加之殆ど毎日の雨天にて非常に往復に悩まされたのである。此旅行中に於て私は初めてキレンゲショウマを採つたのであるから、先づ其採集状況の極あらましを記すこと、する。石槌（鎚）山連峰の一なる天狗嶽の北側土佐に通ずる道に当りて、昔は堀切小屋といふ甚粗末な小屋があつて私共はそこで数泊したのである。一日水を汲まんが爲に深き溪間に下つて行つた、時に同行した者は当時中学海南学校の上級生であつて、近頃（昭和5年頃）迄宇都宮第14師団長をして居られた陸軍中将の宮地久壽馬氏であつた。深きス、タケを押し分けて行く内に丈高く壮大なる対生葉を付け黄花を多数に開きたる一珍植物を見附けたのである。未曾で見たることなきものであつたので、其数本を折り採つて小屋に帰り下山の際漸くにして持ち着けることを得た。時恰も帝国理科大学（現東京大学）の矢田部教授が植物採集の爲に来県せらるゝ際であつたので、実は兼て一行は山中にて邂逅する予定で私共は少しく早く出発したのであつたが、前にも述べたが如く連日の悪天候の爲博士一行は洪水に阻まれて池川にて数日間滞留せられ、私共はそれを知らずに幸して黒森越をして佐川に歸つた時も尚同地に居られたので、私は矢野先生と共に翌日直に引返して博士一行を追つて池川に到り、漸く面会して随行することを得た。博士一行中には三好博士が大学を出られた當時で大学院学生として随行せられ、尚小石川植物園の園丁長 内山富次郎氏や第一高等中学校の安江豊太郎氏及び高知県尋常師範学校の永沼先生なども随行して居られ人夫は7



キレンゲショウマ（写真：吉永虎馬）

（『植物研究雑誌』第7巻、第2号 牧野富太郎、1930）

～8名という実に賑かなるものであった。此の時私は前日採集したる彼の植物を出して博士に尋ねるに、博士も初めて見られたる事とて大変に珍しがられ所属の科さへ確かに言明されず、其形態がレンゲショウマに幾等か似て居て黄花であることからキレンゲショウマとでも言ったら宜しからんとので、石槌に登山したなら必ず之を採らんことを期せられたのである。翌日一行は出発して筒城山（筒上山）に近き小屋に宿泊し



キレンゲショウマ

其翌日石槌山に向かう途中、筒城山の北側の横道即ち今の名野川山国有林内にて再び之を見出したので、内山氏は直に鍬を執って其数株を掘採られ、帰京の後小石川植物園に栽培せられた。後博士は之を基として新属 Kirengeshoma を立てられて植物学雑誌第4巻第46号第1版にて発表せられ、次で其著日本植物図解第1冊第1号第2版にても公にせられたのである。然るに此等発表論文の産地はいずれも石槌山としてあれども、前述せるが如く途中偶然筒城（上）山道の傍にて採集せるを以て原産地即ち石槌山北側深溪の私の創めて発見せる地には博士一行は採りに行かれざったのである。又記文の内に果実は同産地（石槌山）に於て吉永悦郷氏（吉永虎馬の実兄）により採集せられて送られたとあれどもこれも亦間違っている、即私の父懐藏が当時高岡郡別府村別枝に居ったので、同人が同村黒瀧山に採りたるものを兄が博士に送ったことを斯く誤って書かれて居る。これは故意に記されたのか又全くの誤りかは分からないけれど兎に角事実とは大變（変）間違っている記されて居るのである。私は此等の事実を稍悉しく書いて牧野先生の植物研究雑誌へ投稿して居るが、遠からず掲載さるゝとの通知を得て居る※。此植物は其後筒城（上）山の南方溪谷及び剣山や又九州の祖母嶽其他にても発見せられて居る、私は昨年と一昨年続きて筒城（上）山脈の北方幽谷即愛媛県新居郡大保木村元山国有林（名古瀬谷）で諸處（処）多生するを見、又前に記せる名野川山では依然大群落をして非常に旺盛に蕃殖せる状態を見て頗る愉快に感じた。（以下略）

次にコホ（オ）ロギランの事であるが、此蕞蕭（最少）たる可憐の蘭は創めて横倉山の安徳天皇御陵墓傳説地に近き深林中の朽葉の堆積せる中で発見したのである。当時牧野・矢野※両先生と共に登山して小休中、傍の朽葉を掻き除けてピロウドラン（シュスラン）な

どを採りつゝありし際、偶然に此小本を見附けたので直に牧野先生に示したるに、之は面白いものであるとので皆彼処此処を捜して相当の数を得たのである。然るに非常に奇妙なる形態を有するもので、流石の先生も一寸所属を判定するに惑はれた様であった。後露国著名の植物学者にして、特に東洋植物の研究に不滅の大功績を遺されたる MaXimowicz 博士に送りて検定を乞はれたるに、氏も其珍奇なる蘭品であるのに（驚？）かれ左の如く返事せられたのである。（意訳）

御送付の蘭は Neottieae 族（属）Diurideae 亜族（亜属）に属すべき全然新属の一品にしてタスマニア産 *Closodia Burnettia* オーストラリア産 *Clossodia* に類似して居ます。貴君の解剖図は優れて出来て居ます私は自ら一個の蕾を解剖して凡てが貴君の描かれた図と符節を合すが如きことを認めました。私は柱頭の下部にある顕著なる指状の突起に基きて本植物に *Stigmatodactylus shikokianus* と命名しました。

牧野先生は其著日本植物志図篇第一巻第七集第四十三版にて之が詳図を公にせられ後、植物学雑誌第十三巻第百四十三号及新撰日本植物図説頭花及羊歯類部第三十九図版等に於て其図説を発表せられて居る。此植物は其後横倉登山の際最初発見の場所に就きて注意しておても中々見当らぬ様になったのであるが、去大正二年八月偶然にも中宮（現杉原神社）東方約一町許りの石段の傍ら林中に於て夥しく生ぜるを見て採集し直に牧野先生へ送りたるが、先生も過去数十回も登られた事あるにも拘らず、此の如き目に着き易き地に於て嘗て発見せられざりし事に寧ろ驚かれて居たが、後佐川案内記に左の如く記されて居る。

◇コホ（オ）ロギラン（ラン科）

此に決して逸すべからざる一

種の蘭科植物あり、即ちコホ（オ）ロギランにして高さ僅かに三四寸（1寸は約3.03寸）の小草本なり、莖（茎）は直立して枝を分たず葉は小形にして其数少く根には小球あり、花は梢に一乃至三個ありて小形にして牌瓣



コオロギラン

潤大なり。其牌瓣の基部に舌状の附蝕物ありて紫色を呈す牌瓣面にも紫暈あり、其外觀蟋蟀の羽に似たるより予は之れにコホロギロギラン（コオロギラン）の新和名を下せり。而して始め偶然之れを横倉山の樹下に発見し標本と寫生圖（写生図）とを露國（ロシア）のマキシモワ（ヴィ）ッチ氏に送りしに同氏は其珍奇なるに驚嘆し早速研究して之に *Stigmatodactylus shikokianus mo(a?)xim* の新學名を與（与）へて返事し來れり。即ち新属の蘭にて其花柱に指の如き突起物あるより其れに基きて右の新属名を製したるなり。而して面白きは此蘭が遠き印度

(インド)にも産することなり。横倉山にては其後絶へて見られざれしが34年前吉永君再び同山にて採集したり。この蘭は時々消長あるらしきも兎に角植物學上興味ゆたかの饒さかんき品なり(大正5年10月発行 佐川案内記「佐川附近の注意すべき植物」 牧野富太郎)

序に牧野先生の前記植物志図篇に描かれたる全形図4の内右側の花を着けざる一株は、私はコホ(オ)ロギランではなくしてビロウドラン属の幼きものであると思ふ、即ち其下葉の形態附方などが全く他のものと図にても異って居るので明かである。私は此事を先年

先生へ迄申して上げたことがある。近年出版されたる末松直次氏著応用植物学各論下巻413頁にも此図が掲載せられて居る。

此小蘭は腐植土植物で他の近肖(≒近似)蘭類と同じく其塊根内には一種の菌類が潜んで居て所謂内生菌根をつくつてゐる。而して本種も後に紀伊、肥後矢嶽附近、大隅高隈山等で採集せられ又牧野先生の記されたる通り遠く印度にても見出ち(さ?)れて居る。

(以下略)

以上のように、「キレンゲショウマ」に関しては、研究者の発表した論文中において、その産地と第一発見者とが誤って記載されており、「コオロギラン」は、明治22年に吉永虎馬が最初に発見するも、その後しばらく見つからなかったが、大正2年に別の場所で虎馬によって確認されたというのが事実のようである。とりわけ、今回紹介した報告文の中の「キレンゲショウマ」の件のよう

に、学問の世界ではプライオリティー(priority:優先権)が重視されるため、よくありがちな研究者としていたずらに名誉欲に駆られることなく、悪までも正当な立場で行うことが肝要であるといえる。

(おおくら こうすけ / 植物研究家)



小藤文次郎博士

濃尾地震の現象 —根尾谷断層—

安井 敏夫

2016年4月14日夜、熊本県熊本地方で震度7(激震)を観測する大きな地震が発生した。この地震は「横ずれ断層型」で、1995(平成7)年の「兵庫県南部地震(阪神・淡路大震災)」と同様の内陸直下型地震と考えられている。震源が地下10kmと浅く、下から突き上げるような振動と、地面が水平に2cmほどずれるという特徴からそのように判断された。熊本市のシンボルで、明治10(1877)年の西南戦争の舞台となった熊本城の建造物、石垣等に甚大な被害を与えた。しかも、1000回を超す余震が続くというあまり過去に類をみない地震であった。

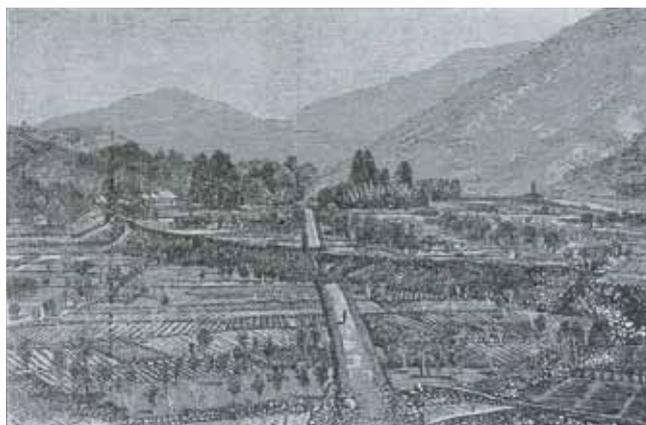
地震の主な原因には、火山活動に関係するものと、急激な断層活動によるもの、それにプレート移動によるものがあるが、後二者の方が規模的に大きいものが多く従って被害も甚大でより深刻である。阪神・淡路大震災を引き起こしたのも「野

島断層」と呼ばれる総延長約10kmにも及ぶ活断層であった。しかもこの場合、直下型であったため被害が大きかった。すなわち、垂直方向に最大50cm、水平方向に最大1.5cmのずれが生じた。現在それは、歴史上の証しとして風化させないために「野島断層保存館」で大切に保管されている。さらに、2011年に発生した「東北地方太平洋沖地震(東日本大震災)」で日本の観測史上最大のマグニチュード(M)9.0の揺れと巨大津波を引き起こし、甚大な被害を与えたのも海底下の断層であったことは記憶に新しいが、この場合は、プレート境界付近で起こったプレート内地震である。日本の地震史上最大の「関東大地震」[1923(大正12)]もプレートの沈み込みによる巨大地震であった。

このように、日本列島には活断層が多く、それに伴う地震がこれまで多く発生しているが、今から100年以上も前の1891(明治24)年10月28日の「濃



水鳥断層〔写真〕(「Fault」と書かれている部分が断層)



水鳥断層〔スケッチ〕(道路を歩く人物が見える)

尾地震」によってできた断層に「根尾谷断層」がある。

北は福井県野尻から南は岐阜県帷子まで、北北西-南南東に100km以上にも及ぶ。水平変位(水平方向のずれ)は最大8m、垂直変位は最大6mで、後者の断層崖が「根尾谷断層」として有名で、国の特別天然記念物に指定・保存されている。旧岐阜県根尾村水鳥に生じたことから「水鳥断層」ともいう。

この地質学上有名な「水鳥断層」を撮影した地質学者が小藤文次郎である〔写真〕。小藤博士は、濃尾地震で「断層地震説」を例証し世界の注目を集めた。ドイツ人地質学者で東京大学の初代地質学教授・E. ナウマンの弟子(第一期生)で、岩石・火山・地震・地体構造など日本の地質学のあらゆる分野で活躍し、当時の地質学の大御所であった。“山陰の小京都”と呼ばれる島根県津和野町の出身で、同町は文武両道の町として知られる。文豪・森 鷗外、哲学者・西 周など数々の著名人を輩出した小さな町で、植物分類学者・牧野富太郎の出身地である高知県佐川町と似たところがある。小藤博士は明治時代に佐川に地質調査に来ており、牧野博士(当時20歳頃)も同行し、化石採集を行っている。その一つに“松カサ石”と呼ばれる中生代ジュラ紀(約1億5000万年前)のウニの棘を採集し、東京大学地質学教室に寄贈したという記録が残っている。牧野博士はその時の様子を次のように記している。「私の郷里、佐川は有名な化石の産地である。貝石山、吉田屋敷、鳥の巣等には化石に珍品が出るので名高い。ナウマンという外国の鉱物学の先生や、わが国地質学の大御所だった小藤文二(次)郎博士等も、よくこの化石採集のために佐川に来られた。」(『牧野富太郎選集 第1巻』1970,東京美術)。おもしろいのは、牧野博士はこの時小藤博士の着ていた鼠色のモーニング

が気に入り、同じ物を洋服屋で仕立ててもらったというエピソードが残っていることである。博士のお洒落な一面が見て取れる。

小藤博士は、富士山などを構成する火山岩・玄武岩を兵庫県の「玄武洞」の名にちなんで命名した。また、日本列島の三波川変成帯、本県では本山町汗見川が産地として有名な「紅レン石片岩」〔写真〕を明治20(1887)年に世界で初めて発見・報告したのも小藤博士である。本岩は、紅色をした大変美しい岩石で、現在地球上では日本とニュージーランド、アメリカ・カリフォルニアの変成帯にしか産しないという極めて珍しい岩石である。ちなみに、日本では高知県の他、埼玉県長瀨、群馬県で見られ、前者のものは『名勝・天然記念物』に指定されている。



紅レン石片岩(寄贈:山下幸利氏)

このように、小藤博士は本県とも関わりの深い人物であるが、余談ながら筆者自身にも多少“縁”がある。それは、筆者が横倉山で日本唯一の「筆石」の化石を発見して、その業績に対し日本地質学会から授与された『小藤賞』(第1回)の「小藤」は、小藤文次郎博士にちなんだ賞である。また、今回取り上げた根尾谷断層のある旧根尾村は、「菊花石」の有名な産地でもあり、日本で最初の発見場所で、現在『国の天然記念物』に指定されている。ちなみに、菊花石が二番目に見つかったのが高知県で、一時期仁淀川沿いに3、4ヶ所産地(ほとんどが旧伊野町)があったようである。かつて越知町と日高村の境界の日高村谷口からも産したことがあり、現在越知町立横倉山自然の森博物館に展示している。

(やすい としお/横倉山自然の森博物館 学芸員)

博物館行事

企画展：『高橋宣之写真展－闇の彩り－』
2016年4月23日（土）～6月5日（日）



清流・仁淀川の稀に見る透き通った清らかな青さを“仁淀ブルー”と名付けた、ネイチャーフォトグラファー・高橋宣之（高知市在住）。氏は、仁淀川を“世界に誇れる川”と絶賛する。

今回、その仁淀川の自然－水・森・光・闇・生き物－の中で、特に「闇」と「光」に焦点を当て、美しい水を生む森の一つである原始の森・横倉山で繰り広げられる“ドラマ”を主に取り上げた写真展を開催。闇の森で淡く光る神秘的なキノコやヒメボタルなどの生命体が演出する作品を中心

に33点を展示。美しい水がある所には森やそれを育む“生命のきらめき”があり、「人生観が変わる」と感じるほどに感動的なものが多い。作品を通して、清流・仁淀川流域の闇の世界で自然が織り成す美の感動に浸り、その魅力を感じ取っていただけることを願った。

主な感想として、「漆黒の闇こそ光を宿す」「自然そのものが芸術と言える。感動です」「すばらしい一言に尽きます。感動しました」「不思議な世界に引き込まれ、自然のすばらしさを再認識」「身近にこんな神秘的な世界があるのかと思った」などがあつた。

企画展：『第38回 高知県写真家協会展「土佐」』（選抜移動展）
2016年6月11日（土）～6月26日（日）

高知県内のお祭り、伝統行事、風俗・暮らし、風景などを写した写真展。出品作品102点。今年もおもしろい作品がそろつた。

越知町関係では、『越知町長賞』に「桜色に誘われて」（田村一利・佐川町）、『横倉山自然の森博物館館長賞』に「思い出川の散歩道」（前田龍夫・越知町）が選ばれた。

企画展：『仁淀川～仁淀ブルーが育む自然～』

2016年7月16日（土）～9月4日（日）〔協力：面河山岳博物館、わんぱくこうち アニマルランド、十河 久〕

高知県の三大河川の一つ仁淀川。愛媛県の石鎚山に端を発し、高知県内を蛇行しつつ太平洋に注ぐ124kmの四国でも三本の呼びに数えられる大河。

これまで釣り・川遊び・キャンプ・カヌー・ラフティングなど「水辺利用率」が全国一であったのに加え、平成24年から全国の一級河川中「水質ランキング」が連続全国1位となった。さらに、その稀に見る透き通った清らかな水の青さが“仁淀ブルー”と名付けられたことにより、さらあにその知名度が高くなってきた。

今回、その仁淀川及びそれに育まれる流域の生物を含めた豊富な自然を対象に、仁淀川のすばらしさを紹介する企画展を開催する。“仁淀ブルー”の写真、沈下橋の写真、オオサンショウウオに関する写真・パネル・模型、仁淀川の豊富な色とりどりの石・水石、それから作った岩絵の具、流域に生息する動物の剥製、水生昆虫の顕微鏡観察、水槽での生きた魚類の生態展示など。

《企画展関連イベント》

- ・水の中のミクロの生きもの観察
- ・茶をおいしくいただく

“発酵茶”である紅茶を除き、緑茶はすべて“不発酵茶”で、加工が違うだけで元はすべて一つの「茶」。

煎茶に関して言えば、「土佐茶」とりわけ仁淀川流域では、茶畑は急な山の斜面にあり、日光が当たる時間が短い。加えて標高が高く（600m±）、霧が発生しやすい。そのことが、新芽にとって大敵の霜が降りるのを防いでくれる。また、“水質日本一”に選ばれるほど水がきれい（“仁淀ブルー”）で、地質的に水はけのいい土壌から成り、“おいしいお茶”ができる自然条件がそろっている。

“おいしいお茶をいただく”ための

4つのポイント

- ①茶葉の量
一人5g[※]（小さじ軽く2杯）
- ②湯の量
100ccの湯呑八分目を2杯
- ③湯の温度
約80℃（湯の入った湯呑を手のひらに置いて熱くない程度の熱さ）
※80℃以上になると渋みの原因であるカテキンが出てくる
カテキンを抑えてアミノ酸を引き出すのがコツ
- ④浸出時間
湯を注いで1分待つ



企画展を通して、“世界に誇れる川”・仁淀川とそれが育む自然の美しさを再認識し、その魅力を感じ取っていただけることを願った。

「仁淀川の美しさに息を飲んだ（広島市）」「仁淀川の美しさを再発見できました（東京都）」「貴重な資料、内容の



面白いパネルに見入ってしまいました」「今まで知らなかった仁淀川の多様な面を知れて良かったです」「写真、資料もなかなか見応えがありました。生まれ育ったこの地は誇りです」などの感想があった。

『夏休み博物館教室』【勾玉作り】

2016年8月13日(土)〔参加者：小学生20名、指導：高知県文化財団 埋蔵文化財センター〕

今年が2回目の「勾玉作り」。参加者の中には、外国の生徒も3名参加してくれた。

最初に「勾玉」について、フリップを使いながら講演を聞く。古代人の装身具(首飾り)で、古墳時代に多い「勾玉」。その形から、動物の牙、人間の胎児、月などをイメージしたものと言われているが、はっきりした定説はない。材質も、動物の牙、ヒスイ、メノウ、水晶、滑石、蛇紋岩などがあるが、ここでは最も柔らかい石(硬度1)である滑石を使用する。

滑石の小板に描いた勾玉の輪郭の一部をノコギリでだまかに切り、その後3種類(粗・中・細)の紙ヤスリで輪郭に沿って削って角を取って丸みを出し、最後に水研ぎで細かいキズを取って、紐を取り付けて仕上がり。新聞紙で磨くと艶が出てなおい。色を付けたい場合は、蛍光ペンで自分の気に入った彩色も可能。

石が柔らかいこともあり、わずか1時間弱で作業は終わったが、各自個性のある勾玉が完成した。



『夏休み博物館教室』【オリジナル万華鏡作り】

2016年8月20日(土)〔参加者：(午前の部)小学生16名、(午後の部)小学生16名〕

恒例となった「オリジナル万華鏡作り」であるが、その夢のある美しさには飽きがこない。部品があらかじめそろっているため、最近では20~30分で簡単に出来上がるようになった。

今回は、毎回万華鏡とセットで作っている作品として、ペットボトルを使った“パタパタふくろう”を選んでみた。ペットボトルの底側約三分の二の部分切断したものを利用し、腕部に通した竹ひごに糸を巻きつけておもりを垂らし、ひごの両端に羽を取り付けおもりの重みで羽が回転し、パタパタしながら降りる仕組みである。細工がやや難しかったようだが、2時間ほどで各自愛嬌のあるふくろうが仕上がった。



《越知中職業体験》

2016年7月26日(火)~29日(金)〔3年生：2名〕

博物館の基本作業である、資料の収集、整理・登録、展示・保管の一連の作業を行う。具体的には、新第三紀鮮新世(約300万年前)の貝化石のクリーニングと古生代シルル紀(約4億2500万年前：日本最古)のサンゴ化石の塩酸処理、植物標本作り。この他、パソコンを使っての企画展(仮想)のポスター原稿作りなどの体験をしてもらった。



友の会だより

『仁淀川水質調べ』【身近な水環境全国一斉調査】

2016年6月4日(土)〔参加者 友の会会員：11名(内事務局3名)〕

例年どおり、定点である①仁淀川本流、②坂折川(支流)、③梅ノ木川(同)の3ヶ所で、COD(化学的酸素要求量)を測定。“水質日本一”の①及び②は「非常にきれい」であるが、市街地内を流れ、家庭排水が直接流入する③は、ヨシが生え、夏にはホタルも飛ぶようになったが、まだ「汚い」という指標である。



『ヒメボタル観察会』

2016年6月23日(木)〔参加者 友の会会員：11名(内事務局4名)、一般：11名)〕

前回は雨で順延になった。ヒメボタルは昨年に比べると多かった。試しに一匹だけ手に取ってみると、極めて小さい。同時に行われたシイノトモシビタケの観察では、昨年は数個体であったが(一昨年は200個体ほど)、数十個体ほど発芽していた。日本では東京の八丈島とここ横倉山だけという“ギンガタケ”は、今回は立木にびっしりと着生してはいるものの、何故か発光していなかった。

その代わりに、この日は梅雨時期としては珍しく快晴で、第三駐車場からは夜空に満天の星が輝いているのが観られた。

横倉山ミニ歳時記

■タムシバ *Magnolia salicifolia*

2016年4月9日(土)に開催された横倉山自然の森博物館友の会「フォレストクラブ」の『聖神社・アケボノツツジ観察会』(小日浦)において、越知町では初めての「タムシバ」(モクレン科)が確認された。

アケボノツツジの群生とヒカゲツツジの混生するチャートの岩場の下段に、最大直径15cmほどの幹が根本付近から3本枝分かれした高さ数mの木に白い花(花弁:6枚)を満開に咲かせていた。葉に先立って花が咲くため葉はまだ出ていなかったため、不確定であったが、枝を少し採集して水に漬けていたところ、タムシバ独特の細長い広披針形の葉が生じたためそれと確認された。

タムシバは葉や枝が噛むと甘味があるので、“サトウシバ”や“カムシバ”の別名があり、タムシバの名は“カムシバ”がなまったものといわれている。

小日浦にまた新たな見どころが増えた。

※写真は他の産地のもの



【博物館日誌(抄)・平成28年度博物館行事予定】

- 3月1日(火)～3月27日(日)
企画展:『日本画家 八木明個展』
- 4月23日(土)～6月5日(日)
企画展:『高橋宣之写真展～闇の彩り～』
- 6月11日(土)～26日(日)
第38回 高知県写真家協会展『土佐』(選抜移動展)
- 7月26日(火)～29日(金)
越知中学校職業体験
- 7月16日(土)～9月4日(日)
夏休み企画展:『仁淀川-仁淀ブルーが育む自然-』
- 8月13日(土)
夏休み博物館教室 ～勾玉作り～
- 8月20日(土)
夏休み博物館教室〔工作〕～オリジナル万華鏡作り～
- 9月24日(土)～11月13日(日)
企画展:『野並允温 傘寿記念個展
～お四国遍路旅を終えて～』
- 10月15日(土) にしみねくみ染色教室
- 12月20日(火)〔予定〕
ワークショップ:「行燈作り」(灯工房ひよこ)

- 12月23日(金・祝)～平成29年1月22日(日)
企画展:『越知町の懐かしい写真展-小日浦-』
(仮称・未定)

【博物館友の会「フォレストクラブ」・平成28年度活動予定】

- 平成28年1月1日(金・祝) 初日の出を横倉山で
- 4月9日(土)
“土佐の投入堂”・聖神社見学とアケボノツツジ観察会
- 5月24日(火) 友の会運営委員会
- 5月28日(土) 友の会総会
- 6月4日(土) 仁淀川水質調べ
- 6月23日(木) 横倉山のヒメボタル観察会
- 11月12日(土)～13日(日)〔一泊二日〕
安土城址・犬山城(国宝)・司馬遼太郎記念館視察研修
- 11月27日(日)
杉原神社旧表参道整備-案内板・説明板の設置-
- 2017年1月1日(日)
初日の出を横倉山で
- 1月末～2月初め〔未定〕
バイカオウレン観察会(日高村)

《お知らせ》



大津修子氏

8月16日、博物館1階の歴史・植物コーナーの一角に『昆虫コーナー』を新設しました。日本鱗翅学会、高知昆虫研究会会員・海地節雄氏に協力・指導を仰ぎました。

昆虫コーナーで展示している標本は、2014年4月17日に故・大津修氏(高知市)の御遺族の方から本館に寄贈された昆虫(蝶)

標本『大津コレクション』〔ドイツ箱60箱分〕*の中から選出したものです。日本の国蝶・オムラサキや宝石のように美しいミドリシジミ類を始め、2014年に横倉山で初めて見つかったヒサマツミドリシジミなどの貴重な珍しい蝶の標本〔ドイツ箱12箱:717点〕が展示されています。これに『海地標本』のオオルリアゲハ、モルフォチョウ、ヘラクレス、コーカサスオオカブト、オオヒラタクワガタなどを含む120点も同時に見られます。

標本を御恵贈頂いた大津様に感謝の意を表するとともに、多くの来館者の方々に鑑賞して戴ければと願っています。

※この内4箱は、和田秀穂氏(高知市)からご好意により寄贈頂いた

高知県越知町立

横倉山
自然の森博物館



THE YOKOGURAYAMA
NATURAL FOREST
MUSEUM, Ochi

〒781-1303 高知県高岡郡越知町越知丙737番地12
TEL0889(26)1060 FAX0889(26)0620
http://www.town.ochi.kochi.jp/

- 開館時間:午前9時より午後5時まで
最終入館は午後4時30分
- 休館日:毎週月曜日(祝日の場合は翌日)
12月29日から翌年の1月3日まで
- 入館料:大人……………500円(※各20名以上)
高校・大学生……………400円(上の団体は100円引き)
小・中学生……………200円
- 越知への交通
高知——JR特急 約30分——佐川——バス 約15分——越知
JR普通 約50分

